

論文の要旨

論文題目 透谷・藤村文学とその時代
「男女交際」言説を中心に
氏名 朴 承柱
学位 博士（文学）
授与年月日 平成18年7月31日

本論文は明治期日本に新しく生じた「男女交際論」が社会に及ぼした影響を考察したものである。日本の近代化は欧米文化の摂取を不可欠としていたが、欧米風の男女関係および夫婦関係は、明治期の人々に当初から強い印象を与え、東西の社会風習の相違を自覚させた大きなモチーフの一つになっていた。そのため、「男女交際」が「日本の近代化」にどのような影響をもたらしたかを探ることは、そのまま「日本の近代化」の意味を問うことになるだろう。

第一章では明治初期の知識人達が経験した、欧米の「男女が相抱き合っただンスを踊る」という異文化体験によるショックから「鹿鳴館」における「舞踏会」の盛衰に至るまでの経緯、そして明治十九年「男女七歳にして席を同じうせず」という男女交際禁止の儒教道徳を真っ向から否定した福沢諭吉の「男女交際論」と「世間」の反応、明治二十年に起きた『穎才新誌』における「男女交際論争」、そして明治二十年を前後にして盛んになった『女学雑誌』における「姦淫」批判、明治三十年以降の「男女交際論」の変化など、明治期全般における男女交際論の展開をたどった。欧米文化の摂取の過程で受容された欧米的男女交際あるいは男女関係のあり方は、江戸期からの男女観を維持する世間と絶えず葛藤を起こしていた。ここでは、この状況を背景において、新しい男女関係を定着させるために数多くの議論が行われ、その方法を模索する動きがあったことを明らかにした。なお、彼等は男女交際を「恋愛」の側面に限ってではなくより大きな枠組みで考えており、「男女交際」の振興は新しい社会の新しい社交の理念と結びついた一つの社会変革運動でもあったことを示した。

第二章と第三章では「男女交際」という新しい男女関係の理想を揚げ、欧米のような社会的土壌のない状況の中でその実践をめざし試行錯誤を余儀なくされた人々の、理想と現実との乖離を扱った。ここでは主に文学作品を分析資料として使って論を進めたが、まず、第二章では明治二十年代の「恋愛」の様相を考察するため、北村透谷に焦点を当てた。その結果、透谷の「恋愛」はそのまま「結婚」に結びつくものであり、しかも「知的な会話」を楽しむものであったことが明らかになった。儒教的倫理観が幅を利かせていた明治二十年代には、透谷の「恋愛」は非常に新しいものであることもわかった。また、透谷自身が知的な会話を楽しむ美那子との交際を「欧米風男女交際」として自負していたことにも触れた。

しかし、透谷の「結婚」は経済的な基盤に基づいたものではなかったため、結局は崩壊してしまった。明治期日本の知識人たちがモデルにした欧米の場合、社会システムが用意した場で行わ

れる未婚男女の「男女交際」は常に「結婚」を前提としていたが、そこでは男性の側に結婚生活を支える経済的基盤があることも前提とされていた。これはジェイン・オースティンの作品『高慢と偏見』を分析することによって明らかにした。

一方、透谷は欧米文化を主に「学問」として学んでいたため、欧米社会の実相を見据えることができなかった。これはただ透谷一人に限るものではなく、当時の多くの知識人に共通していた点であるが、明治二十年代における欧米文化摂取が如何に浅薄で皮相的であったかを示した。

第三章では、島崎藤村を中心に、明治期における開化的知識人の「男女交際」への憧れと挫折を考察してみた。まず、ここでは「ミッション・スクール」の自由な社交の雰囲気や「男女交際」の流行に大きな影響を与えていたことが明らかになった。また、島崎藤村の女性観や恋愛観、結婚観、そして夫婦観を探ることで、開化的知識人が「男女交際」に憧れながらも旧弊な環境に安住していく姿を示すことが出来た。この章では、島崎藤村の個人史をたどって分析することになったが、藤村の姿には当時の多くの知識人に共通して見える部分があった。福沢諭吉の「男女交際」奨励以来、多くの知識人達が欧米風「男女交際」に憧憬を持った。しかし、新旧意識の差はそれをなかなか実現させてくれなかった。藤村の場合は欧米風の「男女交際」、つまり、話題を共有し、心を開いてお互いに分かり合える関係に対する欲求をずっと持ち続けながらも、「恋愛」と「結婚」のいずれにおいてもそれを成就させることが出来なかった。藤村は夫婦の間では実践出来なかった開化思想を、次には親子関係の中で実践しようと試みたように見える。このような藤村の変化は「男女交際」が齎した近代精神の行方がどこにつながっていくのかを示唆しており、考察の意義が十分あったと思う。

第四章では、明治三十年代半ばに発足した「丁西倫理会」という団体と彼等が催した「家族会」に注目した。その結果、当時の哲学・倫理学者達を中心として結成されたこの会が、欧米のキリスト教に対応するような近代日本の社会モラルの育成を目指して、同時代に直接的に働きかけ、新しい時代の男女交際についても積極的な発言と実践を行ったことがわかった。これは、今まであまり知られていなかった事実である。そして、この会の活動の主眼が次第に、男女交際の実践から新しい家族像の形成へと移行していったことも明らかになった。これは明治期の欧米文化摂取が次第に日本的な文脈に移し替えられ、日本的な中産階級（大正ブルジョワジー）を用意していく流れと軌を一にするが、これまであまり注目されてこなかった「丁西倫理会」の活動に焦点を当てることによって、日本の家族観の近代化のプロセスをより明確にする契機を得たことは、この論文における大きな成果の一つである。

また、この成果はさらなる研究課題も残した。この章では「丁西倫理会」が「家族会」を設立する際、「スミレ会」という女子交際会と一緒に会を作ったという事実を明らかにしたが、この点に着目すると、女性が男性との交際の中で自己の存在に自覚的になっていくプロセスを探ることが出来ると思う。これによって、これまでの「恋愛」を中心とする研究では見えにくかった、女性の社会性への自覚や社会の女性観の変容を探ることができよう。

鹿鳴館時代の欧化政策の揺り戻しによって、儒教モラルの復活や大和魂の鼓舞などのイデオロギー教育が盛んに行われるようになった明治後期においても、女子の高等教育は生活レベルで、

欧米への憧れを培う要素をかなり含んでいた。そしてこの憧れには、欧米風の男女関係、夫婦関係への憧れや、中産的家族像への憧れもかなり色濃く影をおとし、大日本帝国のめざした良妻賢母教育と奇妙な習合を産んでいたように見える。このように、女子教育の過程で 欧米風 に触れ、その後多くは当時の慣習に従って結婚したエリート女性たちにとって、その結婚・家族の理想像と現実生活がどのように折り合わされたかという問題は、外発的近代化の道を歩んだ明治日本の欧米文化受容の一典型として、重要な意味をもっている。したがって、この視点から、丁西倫理会 の活動を、明治後期の社会背景と照らし合わせ、この会が実践しようとした「男女交際」の理念的基盤と、それが結局は「家族会」として実践されたという事実の間に、女性観・夫婦観・家族観をめぐって当時のどのような社会的現実が介在していたのかを探ることが、今後の課題である。この研究は、上記のようなエリート女性たちが、男性によって提唱された理念やその実践に対して、妻・母という家庭人の立場からどの程度まで積極的に関与しえたのかについても、常に念頭に置いて行われなければならない。

この研究はまた、明治後期の第一線の大学人が組織した 丁西倫理会 が洋学者と漢学者を共に含む団体であったことを踏まえて、彼等の理想とした結婚・家族像の思想的背景（欧米的家族観と日本の家制度との関係）、彼等の結婚・家族の実像、そして彼等の夫人たちが受けた女子教育などの調査も目指すものであるが、その成果は、これら知的エリートの理論と実践が、日露戦争後に徐々に育ち始めた中産層の結婚・家族像に及ぼした影響力（とくに大正ブルジョワジーの結婚・家族像への）を探る発展的研究の重要な足がかりとなるはずである。